

『蒲原の民俗』新潟平野、驚愕の原風景 (フリーライター橋本啓子氏寄稿)

自身の持つ常識とあまりにかけ離れているために、平易なのに意味を受け取れない文章というものがある。わずか半世紀前に出版された『蒲原の民俗』が、まさにそれだ。

「横田切れの時、ヤチが浮揚して二つに割れ危うく流失しようとしたが、幸いに減水に向かい平水とともに復旧した。黒鳥、田潟その他では一部分田にして稲を植えたヤチまで、洪水となれば浮揚し、時には一角が切断しそのまま下流へ流失したのもあった。」

(金塚友之丞『蒲原の民俗』浮きヤチより)

お分かりになるだろうか。内容はひとまず置いて、著者について述べたい。

金塚友之丞氏は1890(明治23)年、現在の柏崎市に生まれ小中高校の教師をしながら地域調査をし、戦前から新潟県民俗学会『高志路』に寄稿。『蒲原の民俗』はその集大成である。最初の掲載となった高志路151号の『淡水漁法』に『大河津分水もまだ出来ず、排水機というものもほとんど設置されなかった頃、即ち今から約五十年以前におけるこの地帯の人々の、農漁生活をつぶさに知りたかったからである。そんな資料ならばいくらでもありそうに思えるが、イザやってみると記録類など極端に少ない』とある。大河津分水路が安定的に稼働したのは1931(昭和6)年、亀田郷で大規模な排水が始まったのが1948(昭和23)年。氏は、当時既に過去の物となった蒲原平野でのありふれた(がために記録がない)仕事と暮らしを後世に残すべく、地域の古老に話を聞いてこれを編んだ。

一年中田んぼが乾くことがない湛水田は、「地図にない湖」という言葉で旧中蒲原郡亀田郷に象徴されるが、これは比較的最近まで乾田化しなかったため、西・南蒲原郡は大河津分水路通水以前、北蒲原郡は松ヶ崎堀割決壊以前、おそらく亀田郷以上に開拓と農作業は困難であったろう。なにせ北・西蒲原郡の湖は、ちゃんと地図にあった。

先の引用に戻る。ヤチとは枯死した水草の根などの絡み合った層のことを指すらしく、干拓の際にはあえて草を植えヤチを育ててその上に船で泥を運び込んで田んぼを作った。深すぎるため手近な植物を利用して「上げ底」をしたわけだが、結束が緩いと水位と共に浮き上がって漂い始める。それで「田んぼを拾った」とか、抜けたところへ一夜にして池ができたとか、今ではちょっと意味不明な出来事が起こる。早い話が、当時は土地と田んぼが必ずしもイコールではなかったのだ。

『蒲原の民俗』は既に古書でしか入手できないが、機会があれば手に取ってほしい。土地を変えてきた祖先の偉業をしのぶこと、湛水田なりの豊かさがあったこと、私たちはこれからも土地を変えていくことができるのだということに気づかせてくれる。もちろん、意味不明に想像力で挑むだけでも十分に興味深い。上記の引用はまだ易しい方で私自身、挑んでいる最中だ。

橋本啓子はしもとけいこ / 新潟市在住フリーライター。解説付き『蒲原の民俗』を世に出すべく有志と勉強会に参加。同書で触れられた地名の頻度をマッピング

(https://jizoh.info/kai/maps_kindsuka_aza/)、サイト内に金塚友之丞略歴、高志路連載年を示したリストも収録。